戦たびDiARY

筒井康隆

中公文庫

中公文庫

幾たびもDIARY

定価はカバーに表示してあります。

1997年10月3日印刷
1997年10月18日発行

著者　筒井康隆

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Yasutaka Tsutsui

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202958-9　C1195　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

江苏工业学院图书馆
藏书章

幾たびもDIARY

筒井康隆

中央公論社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

一九八八年　7
一九八九年　121
あとがき　169
解説　平石滋　171

幾たびもDIARY

一九八八年

二月十二日（金）

上京。

車中、久間十義『マネー・ゲーム』（河出書房新社）を読む。今まで否定的であった経済小説をアウフヘーベンしなければならない。経済小説が文学性を持ちにくい理由のひとつであったゲーム性を、なんと、テーマにしてしまったことによって逆に現代文学になり得てしまっているのだ。コンピューター・ゲームを、おれは『歌と饒舌の戦記』（新潮社）によってウォー・ゲームにしかなし得なかったが、マネー・ゲームというのは盲点であった。マネー・ゲームの方がずっと、人生ゲームになりやすいのだった。副主人公たるプログラマーの女性が面白い。

新宿の京王プラザ・ホテルに着き、ひと風呂浴びてのち丸の内・東京会館に向かう。芥川・直木賞の受賞パーティなのである。この賞のパーティ、おれは今まで一度も行かなかったのだが、今回は阿部牧郎が『それぞれの終楽章』（講談社）で受賞した。行かねばならない。

芥川賞は池澤夏樹『スティル・ライフ』と三浦清宏『長男の出家』の二篇。池澤氏はおれがこのあいだ谷崎賞を貰った時に中央公論新人賞をとった人で、一緒にパーティをしてもらった仲であるが、結局、なぜか最後まで挨拶できず。実は『スティル・ライフ』をまだ読んでいないのだ。

三浦氏の挨拶が十分も続いたので驚いたが、阿部牧（まき）ちゃんはその埋めあわせみたいにたった一分で降壇。そのあと、阿部牧ちゃんと話す。阿部牧ちゃんの祝賀パーティは地もと大阪でやることになっていて、おれは発起人のひとりでもあるのだが、阿部牧ちゃんはその席でおれに歌をうたえというのだ。どうしよう。歌は不得手である。行くのをやめようか。

阿部夫人に逢うのも久しぶり。十年以上昔、おれと阿部牧郎が揃って直木賞に落ちたことがある。その時、神戸のわが家までタクシーをすっとばせて来てくれてやけ酒

を呑み、そのあと夫婦ふた組で神戸市内を朝まで呑み歩いたものだ。その時はさほどとも思わなかったのに、今夜見るとまことに美しい。あとで徳間書店出版部長・菅原善雄氏と『小説新潮』編集長・横山正治氏とで呑みに行ったのだが、二人ともしきりに「いや、実に美しい」と感心していた。幸福はひとを美しくする。

パーティでは選考委員のひとり陳舜臣氏とも話した。陳さんによれば今日の昼間、直木賞の選考について『オール讀物』のための座談会を選考委員ばかりでやったのだそうだ。阿部牧ちゃんはもはや新人ではない。どこまでの人を対象とするかは今までにもさんざ論じられてきたところである。

二十年前のことだ。阿部牧郎、佐木隆三、筒井康隆の三人はある遊びのグループのメンバーであり、三人一緒に直木賞候補となって三人一緒に落選した。それから苦節十年、佐木隆三が受賞した。さらに苦節十年、阿部牧郎が受賞した。おれはこれからさらに苦節十年をやらなければ貰えないらしい。そのことを陳さんに話すと、陳大人さすがに、いつまでこだわっているのかというあきれた眼でおれを見たが、しかしおれの名前や笹沢左保の名前は選考会の席上、やはり出たらしい。阿部牧郎に受賞させるなら彼らはどうなるのかという話になったそうだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この晩、文藝春秋の重役、編集者諸氏と話すたびにおれはこの話を持ち出した。諸氏は困り果てていた。やさしくも「そのうちあなたが選考委員になってしまいますから」などと言ってくれる。そうなったら自分で自分に賞を授けるか。

前記横山、菅原両氏と銀座「まり花」へ行く。星新一氏が来ていた。藤子不二雄の安孫子さんの方が来ていて、このあいだ書かせてもらった短篇集の解説の礼を言われる。長部日出雄氏も来る。長部さんとはさっきパーティで映画作りのことを話しあったばかりだ。長部さんの作品は全部読んでいて、しばしばあちこちで紹介させてもらっているが、そのことで感謝してもらってもいる。ただし映画作りは、なぜかおれと一緒にはやりたくないそうだ。よくわかります。

十一時半まで呑んでしまった。ハイヤーでハイウェイをすっとばし、ホテル帰着十二時。

二月十三日（土）

九時に起きたが、案の定宿酔いだ。ホテル二階の郷土料理「あしび」で朝食。受験生がたくさんいた。ここでは受験生弁当というのを二千数百円で売っていて、メニュ

ーを見るとなかなか旨そうな献立。しかしこんな旨いものを食って腹いっぱいになったら頭が茫とし、眠くなるのではあるまいか。落第弁当だ。

『中央公論』誌に連載中の「残像に口紅を」の第二回目、書き続ける。

正午、平石滋君と幸森軍也君が来室。幸森君はついこの間解散したわがファン・クラブ「日本筒井党」の会長だった人。今でもファンのために自費で情報誌を発行し続けてくれている。平石君はおれの年譜や目録を作ってくれている人。また新しく目録を出すそうだ。三千部出すのに二百万円ほどかかるらしい。そんなに出さずとも、と言ったのだが、前に千部作った目録は神田三省堂一軒だけに置いたらすぐなくなり（書店員が取りに来たそうだ）四百部売れたのだからと強気である。ファンというのはありがたい。幸森君はベティ・ブープ・フリークのおれに、彼女の顔入りの名刺入れをくれた。

両君はさらにこのあと、『ユリイカ』誌の編集者・西口徹氏に会うといって帰った。『ユリイカ』でおれの特集をするとかで、その相談らしい。何をやる気だろう。

妻・光子及び長男・伸輔、荷物をどっさり持って三時にホテル到着。伸輔は明日から武蔵野美大の入試である。油画科なので道具が多く、特にデッサン用のカルトンが

かさ張るようだ。伸輔は部屋でルーム・サーヴィスの夕食をとり、おれは妻と「あしび」へ行く。

夜、ヨハン・ペーター・ヘーベル『ドイツ炉辺ばなし集（カレンダーゲシヒテン）』（木下康光訳・岩波文庫）を読了。カレンダーゲシヒテンというのは「暦話」とでもいうべきもので、暦に掲載されている教訓的な話、笑話、前年の災害などの情報的機能を持った話などである。ヘーベルはルター派の牧師さんであり、上院議員にもなった人。それまでの暦話が無味乾燥で不評だったため、改善案を提出したら、本人が書かされる破目になってしまったという。「ライン地方の家の友」と名称を改めた彼の暦は大好評で、ドイツ中の都市で読まれたそうだ。

長いもので五、六ページ、短いものでは一ページに満たぬという小品集である。短篇小説の原点ともいうべき素朴さが、ここにはある。というのも、読者は教養のない農民とか職人とかいった一般大衆であり、教訓的でありながらも面白く、単純で、短くなければならなかった。話のはじめにテーマを述べてしまう、ということもあえてやっている。よく知っている話も多い。実作家としてはよい勉強になった。トルストイ、カフカ、ベンヤミン、ハイデガーという人にまで影響をあたえたというのも肯け

る。

二月十四日（日）

六時半起床。伸輔を送り出す。ホテル内の「樹林」というコーヒーハウスでサンドイッチの弁当を受けとった伸輔は、でかいリュックサックを背負い、カルトンを提げてホテルを七時半に出発。武蔵美（ムサビ）は九時必着、試験開始九時半である。今日のテストはデッサン。

もうひと眠りしてから、光子とホテル内の「シェフハット」で昼食。

「残像に口紅を」を書き続け、一段落して、光子と伊勢丹、紀伊國屋へ歩いて出かける。

伸輔は六時五十分に帰ってきた。描いたことのあるモリエール像であったとか。逆光であったが、まずまずの出来という。例によって伸輔はルーム・サーヴィス。おれと光子はホテル内の「珊瑚」で夕食。この「珊瑚」は中近東や中国の料理をビュッフェ式に揃えたレストランである。

二月十五日（月）

伸輔、今日は油絵の試験である。昨日以上の荷物を持って七時半にホテルを出発。光子と「あしび」で朝食。「樹林」でコーヒー。そのあと向かいの住友ビルの「宝石のまち」を歩く。三年前と比べて赤珊瑚の値段が三倍になっていたので一驚。暴騰は地価のみに非ず。

昼食は妻とホテル内の中国料理「南園」で。

「残像に口紅を」第二回を書きあげたので、中央公論社に電話をし、担当編集者の堀間善憲氏にとりに来てもらう。「樹林」で原稿を渡し、少し話す。これは物語の進行につれて日本語の「音（おん）」が一音ずつなくなっていく話なので、本になってしまうと最後の方を先に読まれてしまったりして面白くない。なんとか雑誌連載中に話題になる方法はないものかと相談する。

夕刻、『文學界』編集長・雨宮秀樹氏と担当編集者・吉安章君が迎えにやってくる。妻も招待されたが、伸輔が帰ってくるため辞退。おれだけが芝のフランス料理「クレッセント」へ招待される。そのあと青山の「セカンド・ラジオ」というレトロ色豊かなバーで呑む。『文學界』六月号に短篇、来年の新年号に少し長いものを書くことに

なる。ホテル帰着十時半。

二月十六日（火）

伸輔は昨日試験場に財布を忘れたとかで（馬鹿めが）大学の事務局へ寄るため早いめの七時十分に出発。今日は学科試験（国語・英語）のみで身軽。

正午少し前にチェック・アウト。山のような荷物と共にタクシーで妻と駿河台・山の上ホテルへ移動。部屋がまだ整っていなかったので、地階の「新北京」で昼食。そのあと隣りの「ヒルトップ」で久しぶりに旨いブルー・マウンテンを飲む。

伸輔は三時にホテル帰着。例によって国語がよくできたらしい。問題をおれが解き、採点してみたら八十八点だった。

財布はあったそうだ。事務局へ行ったら忘れものが山積みだったという。多かったものは財布、そして受験票。人間、重要なものほど落すという不思議。

『小説新潮』担当編集者の松家仁之君が、短篇シリーズ第七回目の「鳶八丈の権」の掲載号、及び「短篇小説アンケート」の依頼状と用紙を持ってきてくれた。短篇シリーズの方は八回目以降随時掲載となり、少し楽になった。「アンケート」は内外短篇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com